
鬼姫

railgun

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼姫

【Nコード】

N2834BA

【作者名】

railgun

【あらすじ】

作者がエロゲのシナリオとして書いたものです

しかし、エロ要素の入る余地がなかったので投稿してみようと思いませんでした。

取りあえず、少年が成長していくストーリーです

プロローグ

午後10時、そんなに遅い時間帯では無いけれど、街灯が少ないので真っ暗闇に近かった。

「けっこう遅くなったな」

時計を見ながら呟く。

「早く帰らんと・・・どうせ誰もいないが」

近道をしようと思い、人気の少ない鉄橋を渡ろうとした。

半分近く歩いた時、ふと道の真ん中に誰かがいるのを感じる

目を凝らすとそれが一人の少女だと分かった。

こんな所で何やってんだろう、と思いながら残り半分を渡ろうとする・・・その時

「あっ」

少女がこちらに気付く

「駄目！こっちに来ては！」

ふと、周りが明るくなる。雲に隠れていた月が明るく照らす

「今日は満月か・・・って、何だ・・・あれ」

少女の頭から何かが飛び出している

「あれは・・・角？」

その瞬間、少女はいなくなつた

と、気付いた時には少女は自分の真正面にいた

すると口をガバツと開けて、首もとを喰らいつく

「グハっっ！！！！！」

直後、噛まれたと分かった時には気絶していた……

プロローグ（後書き）

ふつつか者ですがよろしくお願いします

未知との遭遇

昔のことを思い出していた

妹と共に父さん達と過ごしていた日々だ

多分、あの頃が一番人間らしかっただろう……そして、今は――

「あつ」

目を開けると、さっきの少女がいた

咄嗟に身構え……れなかった

自分は布団の中にいた

「良かった、意識が戻って」

「……お前、何者だ？何だ、さっきの角みたいなのは？」

「えっと、信じてくれるかな？実は私……鬼なんだ」

「は？」

目が点になるとはこのことだろう
しばらく思考が停止する

「あー。やっぱり信じてくれてないよ」

「いや、それを信じられる奴が信じられない」

「おっ、上手だね」

「黙れ。とりあえずお前はさっき俺に何をした？」

「えっとね、あなたの血を吸ったの」

「.....」

そう言えば肩がヒリヒリする

「で、何で血を吸ったんだ？」

「私、普段は鬼にならないんだけど

満月を見ると鬼になるの。スーパーサ
いにね」

イ 人みた

「それで？」

「あ、スルー！？」

「続ける」

「それでね、鬼になると記憶が飛んじやう上に人の血が欲しくなる
んだよね」

「何か後遺症は？」

「普通はないよ」

「そうか、じゃあ帰る」

立ち上がってふすまを開ける
開けた瞬間に見たのは外・・・

外の満月だった

突然、頭が痛くなる

まるで何かが飛び出してくるような

「ツツうわアアア!!!」

自分が自分でなくなる感覚

気絶してから30分後に再び意識をなくした・・・

鬼の素質

再び目を覚ました時は布団の中・・・ではなくはりつけにされていた

「なんじゃこりゃー!!!」

「あ、目を覚ましたね。父さーん！」

しばらくして、少女の父親が出てきた

「意識が戻ったようだね。由姫、少し席を外してくれ」

「はい」

由姫という名の少女はすぐに出ていった

「さて、と」

「あんたら本当に何者なんだ」

「その前に一つ謝りたいことがある」

すると、由姫の父親は頭を深々と下げる

「すまん、君を鬼にしてしまった」

「.....」

信じられない、いや、信じたくない

これ以上人間から離れたくない

「どういう意味だよ。さっきあなたの娘は噛まれたぐらいじゃ鬼にならないって言ってたぞ!!」

「普通はね」

「何？」

「大変言いにくいけれど、君には鬼としての素質が元々あったらしい」

「.....」

お互いの沈黙が続く

「.....なるほど。どう足掻いても俺は人間らしくなれないって訳か」

自分を責めるように呟く

「そう言えば君、両親は？」

「いない、事故で昔死んだ。」

「そういうことか.....それで鬼になるのも仕方ない」

「どうして？」

「心に深い傷を持つものは鬼になりやすい。多分、心の何処かで人であることに疲れを感じてるんだな」

「 」

認めたくはないが、その通りかもな

「ところで君、名前は？」

「俺の名前は優治と . . . 言います」

母がつけてくれた名前

今は自分にとって重荷でしかない

その後の話

アパートに帰ると、どっと疲れが溢れてきた。優治は由姫の父親の車で送ってもらった

帰り際に言われたことを思い出す

「明日もう一度話をしよう。朝9時に由姫に迎えにいかせるから」

風呂も入らずに布団に入る
とてもそんな気分ではない

首筋を手で触れる。あんなに深く噛まれたのに傷ひとつなかった

「鬼に．．．なっただってことか」

これからを思うと本当にいやになってくる

「いつそ本当に鬼になった方が．．．」

睡魔に襲われ、優治は眠りにつく

その後の話（後書き）

短すぎました

鬼の住む家

「ピンポン！」

朝からチャイムの音が聴こえてくる

不快感を感じながらも優治は布団から出てくる。

ドアの鍵を開けた瞬間、勢いよくドアが開かれた

「おっはよー、優治君！」

鬼を名乗る少女が挨拶をする

「……何のようだ？」

「やだなー。迎えにいくって昨日言ったじゃん！」

「……そうだったな。」

今日は土曜日。朝から不快感が最高潮に達しながらも由姫についていく

「それにしても昨日行っただけなのによく俺の家が分かるな」

「えへへ、昨日君が寝てる時にこっそり探索機をつけといたからね」

「まず、警察に行ってもいいか？」

「ウソウソ、冗談だよ。鬼の気配を辿ったの」

「何だそれ？」

「えっと、私達鬼は互いの居場所が分かるの。優治君も慣れてくれ
ば分かるよ」

『私達』、このフレーズが気にかかった
この女のように自分は今や化け物

「他に鬼はいるのか？」

「その事は後でゆっくり話すよ。っと、あれが私の家だよ」

指をさされた先に目をやる

昨日は暗くてよく分からなかったが、かなり大きい和風の家だ

「我が鬼塚家へようこそ」

そうして優治は鬼の住む家へと入っていった

鬼の呪い？

屋敷に入ると、着物をきた見知らぬ女の子がこっちに来た

「あつ、鬼姫様。お帰りなさいませ」

「鬼姫っていわないでよ。由姫って名前があるんだから！」

軽く口を尖らす由姫

「うふふ、はい由姫様。っと、後ろにいらっしゃいますのが例の殿方様でございますね？」

「あ、紹介が遅れたね。彼女は仕様人で仁田真琴って言うの」

「おはようございます、優治様」

「ああ、おはよう．．．ございます」

急に恐縮してしまった

「真琴とお呼びくださいね」

「はい．．．。」

「そう言えば、由姫様。」

「何？」

「旦那様がお呼びです。客間に来るようにとおっしゃっていました」

「分かった、じゃあ行こう優君」

「待て、何だその呼び方は？」

「だって優治って長いし。今日から優君ってよぶね」

「もう、勝手にしろ・・・」

本当に疲れる、この女
こんな奴に鬼にされるなんて

「優治様！」

ふと、真琴さんに声をかけられる

「はい、何ですか？」

「あの、由姫様と仲良くしてあげてください」

「無理ですよ」

「由姫様はずっと一人で鬼の呪いに苦しんでいたのです。貴方様のよ
うな方がいらっしやってくれて良かったです」

「呪い？」

「さっ、早く行こう優君！」

急に話を中断されて、優治は客間へと連れていかれた

鬼塚家の秘密

客間に通されると、すでに由姫の父親がいた

「おはよう、優治君」

「・・・おはようございます」

「さて、改めて自己紹介をしよう。私の名は秀昭だ、よろしく」

「・・・よろしくお願いします」

「そんなに緊張する必要はないけどな」

「で、話って何ですか？」

「うん、そうだったな。えーと、どこから話そう・・・何か聞きたいことはあるか？」

「さつき真琴さんが鬼の呪いとか言っていましたけど、どういう意味ですか？」

「うん。じゃあ、そこから話そう」

「昔話になるんだが、ここ鬼塚市はかつては大きなパワースポットでね。鬼とか妖怪とかがたくさんいたんだ」

「もう最初から話がぶっ飛んでいますか？」

「優君、人の話は最後まで聞いてあげて」

「で、その土地をおさめていた殿様と姫様がいたんだけど．．．。ある日姫様が鬼の子供を身籠ってしまつてね。当然、殿様はその子供を流産させた。それから悲劇が始まつたんだよ」

「悲劇？」

ふと隣りを見ると由姫が静かにうつむいていた。

「姫様はその後お見合い相手と結婚して子供を産んだ。しかし、子供には鬼の角が生えていたんだよ．．．。」

「なるほど、それが鬼の呪いという訳ですか」

「ああ．．．。」

秀昭が小さく肯定する

「由姫はその姫様の子孫だね。先祖代々生まれた子は皆鬼の子だった．．．あの子の母親もね。」

「そう言えば、由姫さんの母親は？」

「いないよ」

突然、由姫が口を開く

「お母さんは．．．私を生んですぐに行方不明になったの」

「．．．」

重い沈黙が続いた

「さて、ところで君は一人暮らしだそうだね」

「そうですが．．．何か？」

「君がこうなってしまったのも私達のせいだ。せめて君の生活はこちらで保証させてくれ」

「と、いつと？」

「この家に住まないか？」

「．．．．．」

どうせあの家には何の思い入れはない
しかし急過ぎる話だ

しばらく考えて答えを出す

「．．．．．分かりました。言われた通りにします」

「やったあー」

今度は由姫は満面の笑みでこちらを見つめる

「じゃあ、荷物の整理をしてきてくれ。おーい、真琴！」

ふすまが開く

「お呼びですか？旦那様」

「ああ、由姫と優治君と一緒に彼の家に行ってくれ。荷物の整理があるから」

「かしこまりました」

そして三人は優治の家に行った

導く答え

三人は優治の部屋の前に立っていた

そして優治は鍵をとりだして開けようとする……のだが

「あれっ、鍵開いてるぞ？」

「ひょっとして泥棒！？一度会ってみたかったんだよね」

「由姫様、そんな物騒な事をおっしゃらないでください！しかし、真っ昼間から泥棒ですか？」

「確かに少し考えられないですね」

休みの日の昼間から泥棒する奴がいるとしたら由姫並の馬鹿だよな
と思いつつ恐る恐るドアを開ける

玄関を見ると一足の靴があった

瞬間、優治の体に緊張が走る

「……………紫織。」

すぐさま家の中へ駆け込む。すると、リビングに一人の少女がいた

「兄さん、お久しぶりです」

「何でこんな所にいるんだ？」

絞り出す様にして尋ねる
嫌な汗が出てくるのを感じる

「お話があつて来たんですが……そちらの方々は？」

「お前には関係のない事だ」

「また……私の知らないところで無茶をしてるんですね」

「よ、用件は何だ？」

軽い罪悪感を感じる

「また、こちらに戻ってきて頂けませんか？」

「それは……出来ない」

「どうしてですか？」

「俺は今日からこいつらの家に住むことになったから」

「そうやって、また私を置いていくんですか？」

「ツっつ!!」

胸が締め付けられる

逃げたいけど……出来ない

「兄さんはあの日、これ以上迷惑をかけたくないと言って私を置い

て出ていきました！でも．．．本当は違いますよね？」

呼吸が速くなる
足が震えてくる

「兄さんは私といたくないんでしょう？」

「ち、違う．．．。俺は．．．もう誰も失いたくなかったから．．．だから」

「だから、私を見捨てたと？」

力なく頷く

もう、嘘をついて逃げたくない

「私は兄さんの前から一度もいなくなつたことはありません！むしろ、兄さんが自分からいなくなつていているんですよ？」

「お互いに大切な人がいなくなる悲しみは知っているはずです！．．．なのに．．．どうして私と一緒にいてくれないんですか？」

「ごめん、紫織。本当に駄目な兄だな」

「身寄りのない俺達を引き取ってくれた父さん達に顔向けできないよ．．．」

「兄さん、私を置いていかずに一緒にいてくれませんか？」

もう、逃げない

「ああ。俺は二度とお前を見捨てない」

「あの、お取り込み中悪いんですが私達を完全に忘れてるよね？
優君」

「あつ、悪い。お前らいたんだっけ」

「何その態度！？ひどいよ」

「取り敢えず、荷物の整理をしましょう優治様！」

「分かった、そうだ紫織！」

「はい、何でしょう？」

「少し荷物整理手伝ってくれないか？そして終わったら一緒に来て
くれ」

「はいっ、分かりました」

すぐに紫織が笑顔になる

久しぶりに自分も笑顔になれた瞬間だった

新しい同居人

「・・・・・・・・・・・・・・・・つまりそういう訳なんだ」

客間にいるのは優治、由姫、秀昭、そして紫織の四人
今秀昭が事の経緯を紫織に話したところだった。

「・・・・・・・・兄さんが・・・・・・・・鬼？」

声が震えている

まあ、当然か

「・・・・・・・・かつこいいですね」

紫織以外の一同がズコツと漫画のように倒れる

こいつ・・・・・・・・天然すぎる、由姫以上に

「何か特殊能力とかが使えたりするんですか？」

「えっと、鬼になったときに戦闘力がぐーんと上がるね。他は、普
段から回復力が高いぐらいだ」

「太陽の光とか大丈夫なんですか？」

「血を吸うといっても吸血鬼ではないからね、大丈夫だよ」

「じゃあ鬼って凄く便利ですね」

由姫が急に口を開く

「それでも．．．やっぱり普通の体に戻りたいよ．．．」

「あつ、ごめんなさい由姫さん。私、無神経すぎました」

「紫織ちゃんが謝ることはないよ。変な事言つてごめんね」

何だか空気が重い

別の話題を作らねば．．．

「そういえば、学校とかはどうするんですか？」

「ああ。その事なんだが、優治君には今の学校を転校してもらおう」

「構いませんが、理由だけ教えて下さい」

「満月を見ると鬼になるって言ったけど例外はあるんだ。激しい感情の変化によつては鬼にならないとも言切れない」

「なるほど。しかし、どの学校に行つてもその危険はあるんじゃないんですか？」

「まあそうなんだが、君の転校先の学校は普通の所とは事情が違ふんだ」

「世の中からみて明らかに異質な力を持っている生徒達の学校なんだよ」

「訳あり集団ですか。」

「そうだ。もちろん由姫もその学校に通っているが、特に大きなト
ラブルもない」

「なら、私もその学校に通いたいです！」

突然、紫織が間に入ってきた

「兄さんと一緒の学校がいいです、出来ませんか？」

「よし、分かった！学園長とは顔馴染みだから何とかなるだろう」

「ハアー、良かった」

ホッと安堵する紫織

「紫織もこの家に住むのか？」

「秀昭さんや由姫さんが迷惑じゃないなら一緒に住みたいです」

「私は別に構わないが」

「私も紫織ちゃんみたいな可愛い妹が欲しい！」

「じゃあ・・・」

「ああ、我が鬼塚家へようこそ紫織君」

「はい、よろしく願います！」

元気よく答える紫織

話は上手くまとまったようだ

由姫の親友（攻略対象）

今日は日曜日

秀昭が学園長に挨拶しに行こうと言い出した。

「その学園長って学校の理事長みたいなもんですか？」

「うーん、普通の学校とは形態が違うからな。ま、でも似たようなもんだよ」

「そうですか」

「ねえねえ、優君は勉強できるの？」

「自分で言うのも何だが成績はそこそこ良かった」

「ほんと？やったあ」

「どつという意味だ？」

「だって優君がいれば宿題写せるでしょ？」

「自分でやれよ」

軽く由姫にチョップする

「いたっ、も〜冗談だよ！」

「さっ、皆早く準備してくれ。」

秀昭に言われて急いで仕度をする一同

「ここが私達の学校、常盤学園だよ」

一番前で先導していた由姫が急に立ち止まる。
その100mぐらい先に小さな校舎があった

「けっこう小さいんだな」

「うん。何せークラスしかないからね、全学年合わせて」

「マジかよ……」

どこの田舎の学校だ

「よく閉校にならないな」

「何か市の方から補助金が出るみたいでね、何とかまかり通ってるの」

と、会話をしているうちに校門に着いた
小さいけどけっこうデザインに凝っていた

「なかなか綺麗な学校ですね、兄さん」

「そうだな。訳あり生徒の集まりだからもう少し荒れてるかと思っ
た」

その時、誰かが横切るのを感じた

「あっ！ひなちゃん」

ひなちゃんと呼ばれた少女はこちらを振り替える

「由姫、誰この人達？」

「新しい家族の優君と紫織ちゃんだよ」

「……いったい私の知らないところで何があった訳？」

溜め息をつく少女

「紹介するね、彼女は私の友達の楠木日向ちゃん」

よろしく、と軽く会釈される

「それでひなちゃんは何しに学校に来たの？まだ日曜日だよ」

「部活よ、剣道部の練習」

「へへ、大変だね」

再び溜め息をつく少女

「で、由姫の方こそどうしてここに居るの？」

「私達は学園長に挨拶しに来たんだよ。明日からこの二人が編入するから」

「へ、聞いてないよ!？」

驚く日向

ま、そうだろうな急に言われたら

「でも、本当だよ」

「……ここに来るってことはこの二人も何か力があるの？」

「うん。優君は鬼の力を持っていて、紫織ちゃんは力はないけど彼の妹だから」

「おい、そんなこと話してもいいのか？」

「大丈夫だよ。この学校の皆私が鬼だって知ってるから」

「そうなのか……」

チラリと日向を見た

一体彼女にはどんな力があるのだろうか？

「私はね、人の心を読み取る力を持つてるの」

「……」

早速心の中を読まれた

「そうなんだよ、ひなちゃんすぐ心を読むからトランプいつも負け
ちゃう」

「いや、由姫は力使わなくても表情で分かるよ」

「えええっ、そうなの!？」

クススと笑う日向

この二人は本当に仲が良いのだろう

「じゃあ私はこれで。また明日ね、三人とも」

「部活頑張ってね!」

すると日向は校舎の中に入っていった

鬼狩のリーダー

学園長への挨拶を済ませたところで、由姫が校舎を案内しようと言
い出した

「で、あっちに見えるのが体育館だよ」

主要な建物を順番に案内していく由姫

「大体これぐらいしか使わないから」

「そうか、案内すまないな」

「いって、いって」

「そう言えば、生徒は何人いるんだ？」

「えつとね、有馬君でしょ、みつちゃんでしょ……」

指で数えている由姫

「クラスしかないなら把握してるよ」

と、思いながらも数え終わるのを待つ

「優君達も含めて9人だよ」

「やっぱり少ないな」

「でも、みんな個性的で楽しいよ！」

その時、後ろから変な気配を感じた

振り向くとそれは一人の少年だった

「おはよう、鬼姫様」

「あ…………おはよう」

明らかに由姫の表情がおかしい

「ところで……………」

こちらに視線を向けてきた

「君、鬼だよな？」

突然由姫が険しい顔になる

「ゆ、優君は私のせいで鬼になっただけだから手を出さないで！」

「言い掛かりはやめてくれないかな」

急に鋭い殺気を感じる

由姫は今にも泣き出しそうな顔になる

「一体、あんたは何者なんだ？」

「俺か？俺は金城亮」

そして、と付け加える

「鬼狩のリーダーだ」

「つつつ！！！」

声にならない叫びをあげる由姫

「鬼狩って何だ？」

「優君！！」

突然、由姫に名前を呼ばれた

「もう、いいから………帰ろう」

「いや、でも………」

「お願い、優君は知らないで……この事を」

「………分かった、帰ろう」

もう一度金城の方に目をやると彼はもういなかった

鬼塚家と鬼狩

「前にお父さんが話したじゃない？殿様と姫様のこと」

家に帰る途中で突然由姫が口を開いた

「それがどうしたんだ？」

「．．．．鬼狩もねそれに関わってるの」

由姫の表情は暗かった

「殿様は姫様に手を出した鬼を殺そうとしたの．．．でも、どの鬼がやったのか分からなくて」

突然由姫が黙りこむ

「言いたくなかったら、言わなくてもいいんだぞ？」

「ううん、これは私自身の問題だから。それに、やっぱり優君達にも知ってもらいたい」

大きく深呼吸をして再び話始める

「殿様は鬼塚の鬼全てを消そうとしたの。そこで、殿様は特別な力を持つ人達を集めて実行した」

「それが鬼狩って訳か」

小さく頷く由姫

「それで、代々金城家が鬼狩の頭領を務めているんだけど。亮君は六代目頭領で歴代の中で一番才能があるの」

「どんな能力なんだ？」

「彼はね．．．人でないもの、つまり無機物とかを自在に操るの」

「でも、鬼は俺達以外にいないし何でまだ鬼狩があるんだ？」

「それは．．．分らない．．．けど」

「けど？」

「私のお母さんは鬼狩に連れて行かれたの．．．」

ポロポロ涙を流す由姫

「だからね、怖い．．．亮君が何を考えているのか．．．」

「由姫．．．」

こいつも一人でいろいろと抱え込んでいるらしい

優治は咄嗟に由姫の頭を撫でた

「あっ．．．」

由姫の顔が赤くなるのが分かる

「大丈夫だ。一人で悩むな俺達がいるから」

「えへへ、ありがとう優君」

「うん。若いつていいな！」

「兄さん、私にも撫でてください」

不意に後ろから声が届いた

あっ、そういえばいましたっけ

「あはは、夕焼けがきれいだな」

我ながら強引に話題を変えるのだった

今日から俺は！

「はぁー。」

朝から何回溜め息をついただろうか

「あ、あの、私の料理お気に召さなかったですか？」

真琴さんが心配そうにこっちを見つめる

「いや、違いますよ。いつも通りとても美味しかったです」

「そうですか？良かったぁ」

ホッと安堵する真琴さん

朝からこんな調子なのには理由がある

「今日から学校ですね兄さん」

「……そうだな」

今日は月曜日

常盤学園に初めて通う日だ……だけど

「憂鬱だ……」

「何いってんの優君！今日は記念すべき青春デビューじゃない」

「ならねえよ」

「まあ、それはいいや。そろそろ準備してね」

「分かった」

転校初日の最初の関門は自己紹介だった

「それじゃ、二人自己紹介して」

担任の鈴美遥先生が自己紹介を促した

「鬼塚紫織です。えっと皆さんよろしくお願いします」

ペコリと頭を下げる紫織

次は俺の番か

「鬼塚優治です。．．．よろしく」

軽く会釈する

「はいっ。じゃあ、優治君は有馬の隣りで紫織さんは由姫の隣りに座って」

言われた通りにする二人

「よろしくな、優治君！」

いきなり有馬から声をかけられた

「あ、ああ。よろしく」

「由姫の遠縁の人なんだって？」

そういう設定なのか
とりあえず話を合わせよう

「ああ、そつだよ」

「あの家めっちゃ金持ちだからな、いいな」

なかなか話易そうなタイプで助かった

「えっと、有馬さんはどんな能力を持ってるんですか？」

「ああ、俺？俺はね風を操れるんだ」

「風、ですか？」

「そ。まあ、普段は女子のスカートをめくる事にしか使わないけど
な」

「一瞬凄い能力だと思った俺が馬鹿でした」

ある意味凄い人だけど

「そういう優治君は？」

「俺は．．．鬼の力を持っています」

「なんだ、由姫と一緒になのか。つまらねえな」

落胆する有馬

「でもさ、鬼の力ってレアな能力だよな」

「そう．．．何ですか？」

「ああ、滅多にいないからな。他にレアな能力持ってるのは海人と亮ぐらいだ」

「海人さんはどんな能力何ですか？」

「あいつはな、人と龍とのハーフなんだよ。」

「何か俺と似てますね」

「そうだけど、あいつは規模が違う。一度怒らせた時に嵐を呼んだくらいだからな」

「．．．．．」

恐ろし過ぎる能力だ

海人って人は要注意人物だな

そう思った時、突然チャイムが鳴り響く

「やべ、一時間目体育だから早く着替えんと．．．．．って優治君

は体操服もつてきてんの？」

「ああ、ありますよ。元の高校のデザインですけど」

「なら良かった。早く体育館に行こうぜ今日はバスケットだから」

優治は有馬と共に体育館に行ったのだった。

しかし、この後重大な事件が起きるとは誰も思いもしなかった

何事も諦めずに

「じゃあ、今日はバスケットをやります。」

若い男の先生がバスケットボールを持ちながら言う

「能力は少しだけなら使ってもよし。ま、言わなくてもお前ら勝手に使うけどな」

「ただし、限度を考えたよ！死人は出すなよ、頼むから」

学校でこんな注意されるなんて・・・

「はい、じゃあ組み合わせを決めるぞ。このくじを引いてくれ、紙に赤と白が塗られてるから」

準備にくじを引いていく一同

「俺は・・・赤か」

優治は紙を開いて確かめる

「やったあ、私と同じだね 優君」

紙をこちらに見せてくる由姫

結局、赤チームは優治・由姫・日向・海人になった

「じゃ、五分間作戦タイムにするぞ」

日向と海人がこちらにやってくる

海人が口を開いた

「とりあえず負けは決定だな」

「だね」

賛同する日向

「な、何ですか？皆強いじゃないですか」

「甘いな、転校生君」

「えっ？」

「向こうには亮がいるんだぞ」

「あ……………」

そう言えばそうだった
無機物を自在に操る亮

「バスケットボールも無機物だからな。何もなくても向こうにボールが行っちまう」

「それに、亮君を攻略出来ても有馬君の風の能力があるしね」

日向が苦笑しながら言う

「つてことで、俺らの目標はいかに格好よく負けるか……だ！」

「逆に清々しいですね」

「それに、向こうの気合が凄いらな。見てみるよ」

白組の方に目を向ける

「私の方が点取ったら昼食おごりだかんね！」

「ないない美奈子、俺が負けるとか有り得ねえし」

有馬と美奈子と呼ばれる女の子が口論していた

「まあまあ、落ち着いて下さいお二人とも」

紫織が二人をなだめる

「紫織ちゃん、あの二人は何言ってもきかへんよ」

「どうでもいいけどよ、お前らにボールは渡さないぜ？」

「何？そつか、亮も俺の敵か。よし、誰でもかかってこいやー！！」

「兄さん、助けてー！！」

涙目で訴えてくる紫織

すまん、あの面子じゃ無理だ

「もはやサバイバルだな、あっち」

「……そうですね」

「まあ全力は尽くそうよ、優君！」

「勝ち目はないけどな」

「そろそろ試合やるぞ。ボールは人数少ない赤組からな」

先生が海人にボールを渡す

「それじゃ、始め！」

試合開始のホイッスルと共に海人がボールを構える

「左手は……そえるだけ」

格好いいのかそれ？

半ば呆れ気味でボールの行方を見る

「はい、すまんな海人」

ボールの周りに小さい竜巻が発生する
有馬の能力だった

あっという間にボールは有馬の所へ……行かなかった

竜巻が消え、ボールが亮の元へと転がっていく

「だから、取らせねえって言っただろ？」

「クソ、亮の野郎め」

悔しがる有馬

するとボールは勢いよくゴールに向かった

しかし、

「させねえ！」

有馬の風がそれを妨害した

「お前だけには負けねえぞ亮！」

こいつら、本当に何やってんだ？

「有馬が馬鹿で助かった。これは勝てるかもしれんな」

海人が拳を握る

「よし、少し本気を出そう」

すると、海人の頭から角が生えてくる

「お、やる気出したね海人君 優君も頑張って」

「このメンバーに混じったら確実に死ぬぞ！」

「諦めたらそこで試合終了だよっ」

「諦めなかったら人生終了だよ！」

とは言ってもこのままボーっとするのもどっかと思っ

「仕方ない、俺も参戦するか」

．．．．激戦地の中心へ

「ん、ちょっと待て」

よく見るとボールがこっちに向かってくる

三人はボールに目を向けずに互いに乱闘している

「チャンスだよっ、優君！」

「おっっっ！」

ボールを手に取りドリブルしながら相手側のゴールへ

そして、シュー．．．．

「させへんよっ」

突然、誰かにボールを奪われる

「だ、誰だ？」

「ん？私は花宮美月。転校生でも手加減せんよ！」

素早く逃げ回る美月

急いで彼女を追う

「くっ、速い。」

と、その時

「美月、邪馬すんなあー！」

有馬の突然の攻撃

「きゃっ!?!」

バランスを崩す美月

「危ない！」

急いでダッシュして美月の体を支えようとする

しかし、あまりにも勢いよく美月が倒れかかってきたので支えきれずに一緒に倒れこむ

「いつてええ!?!」

背中に強烈な痛みが走る

「ふにつ」

ふと手から変な感触を感じた

「キャツ！」

美月が叫び声をあげる

「いたた、一体何が起きたんだ？」

体を起こして様子を見る

自分の手は．．．美月の胸を触っていた

「のわあっつ！！！！！」

咄嗟に手をどかす

「い、ごめんなさい．．．」

「え、ええんよ。ありがとうな」

顔を真っ赤にしながらお礼を言う美月

「．．．」

穴があつたら入りたい

いや、いつそ穴になりたい

「プーー!!」

試合終了のホイッスルが鳴り響く

「両者引き分けだ」

暴れまくっていた三人の動きが止まる

その瞬間、皆の視線がこちらに向く

「何やってんだ、優治？」

有馬が凄い目で見てくる

「はわわわ、優君ったら大胆！」

「ち、違うんだ。これには事情が!!」

「兄さん、変質者の弁解みたいですよ」

「.....」

安西先生、普通のバスケがしたいです

この事件は後に常盤学園の黒歴史と呼ばれたのだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2834ba/>

鬼姫

2012年1月14日23時59分発行